

創造の自由

—バウムガルテンにおける「中間的認識 (scientia media)」という観点から

津田菜里 (一橋大学)

神の世界創造と芸術家の作品制作とを類比的に語る思想は、古くはプラトン以来確認されるものであり、決して珍しいものではない。本発表が扱う18世紀ではとりわけ詩人を創造者と評価する発想が散見されるようになり、その傾向は美学の創始者であるバウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762) にまで及んでいる。しかしながら、類比性を強調することは、神による「無からの創造」こそが真の創造であるとするキリスト教的伝統との衝突を生じさせる。もちろんこの伝統は18世紀においても受容されていたのであるが、ヴォルフ学派はライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の可能世界論を芸術家の制作論に適用することで、芸術家が創造するという表現を是認した。バウムガルテンもまた、可能世界論に基づいて「中間的認識 (中間知) scientia media」という術語を芸術理論に適用し、芸術家の創造性を基礎づけることに成功したとされる。私たちもこの立場にたち、中間的認識についてのより詳細な検討から、芸術家の創造の重要な契機となりうる「自由」の問題に迫りたい。

そもそも「中間的認識」とは、モリナ (Luis de Molina, 1536-1600) によって提唱された概念である。中間的認識は、神がもつ三種の認識の一つとして、すなわち神の自由な意志の働き以前に自身の能力の及ぶ一切を認識する「本性的認識 scientia naturalis」と、神の自由な意志の働き以後にその結果として実際に生じた一切を認識する「自由な認識 scientia libera」との中間に位置づけられる。第一節では、モリナにおける三種の認識の定義を確認した上で、ライプニッツがそれをどのように定式化したのかを概観する。前者については『恩寵の賜物、神の予知、摂理、予定及び劫罰と自由裁量との調和』を、後者については『弁神論』をそれぞれ参照する。続く第二節では、まず「この世界とは別の世界にかかわる、現実的なものどもについてのあらゆる規定を、神は《中間的認識》によって知る」(『形而上学』§. 876) というバウムガルテンの中間的認識の定義内容を明確にする。そこでの理解を踏まえ、中間的認識が作品を創造する芸術家にとってどのようにはたらくのかを、「芸術家による創造」という主題性をもった『美学』の論述において明らかにする。以上の検討から、バウムガルテンは、モリナやライプニッツの中間的認識の区分基準を独自の視点で再定式化し、その上で可能世界を現実化する神に類比的な自由を芸術家に認めたのではないかと、という理解を導きだすことができるであろう。